

今年に限ったことではないですが、どこか見た事のあるような、既視感のある作品が多くあると思いました。ここで言う既視感とはアウトプット段階の形態の類似で、緻密なサーベイをして魅力ある設計手法の提案が行われているのにも関わらず、最終的なデザインはその手法とは関係のない「カタチ」で出来上がっている・・・。与条件を自ら設定できる卒業設計は、独創性が一番に求められるものだと思いますが、インターネット等で情報が氾濫した現代の状況では純粋に新しいものを作り出すのは難しい事なのかもしれません。むしろ、ありふれた情報の中から目的とする適正な情報を選択する能力が必要になり、同時に、見せかけの「カタチ」より確固たる設計プロセス<本当にやりたかった事>が重要になり、それが卒業設計の独創性へと繋がっていくのではないかと思います。

最優秀賞の渡邊案「渋谷積層小学校」は、小学校を公園と一体化させ積層した案で、その螺旋状に巡回していく外部空間の広がりや、おおらかな空間構成が魅力的でした。都心部における子供の居場所が減少していることは事実なので、このようなオープンスペースはあって良いと思いますが、実質床面積の配分など予条件の設定としてはいささかルーズであるように感じました。敷地周辺の高層マンションや商業ビルなどの周りの環境との繋がりを含めて、都心部における高密度な環境のなかでの小学校のあり方をもっと示してほしかったです。

優秀賞の板部案「故郷 甘木んコアば再構築します」は郊外の旧市街地と大型店舗の集まる新市街地との重心のズレに着目し、公園のような市民プラザを提案していました。衰退しつつある地域の活性化の解として、安易に象徴的な建築のヴォリュームをつくる事せず、人の繋がり重点をおいた緩やかに連続する「居場所」を提案した事に共感を覚えました。

同じく優秀賞の大越案「じいちゃんが障がいを教えてくれた」は、障害を持った老人とその家族の為の「住宅」です。不特定多数の人が利用するビルディングタイプではなく、あえて「住宅」という限定された条件の中で、光や音、触感などを手がかりに身近な身体性からユニバーサルスペースとは何かを問う、批評性の内在する作品でした。特殊解であるが故に、社会性や普遍性といったことが希薄になるのではないかといった疑問を払いのけるだけの、丹念で細かいサーベイと、膨大なスタディー量が表現されており、それが、案の強度を増し、アイデンティティーを獲得していたと思います。

2次審査まで残った岸田案の「空白の事項」も意欲的な作品でした。刑務所に満期釈放受刑者を収容するシェアハウスのような要素の機能を組み込み高層化させて、社会との共存を図った案でした。一見、オーバースケールのツインタワーで、奇をてらった暴力的な案かと思われましたが、既存の高層建築に隣接する立地条件や刑務所特有の「塀」を拡張するアプローチなど、うまく理論武装がされていて、不思議とリアリティが感じられました。もう少し議論にあげたかった作品です。

清水案「崩しを用いた建築」は卒業設計で特に多い美術館ではなく、小学校から飛び出した「美術室」という視点からのプロセスが秀逸でした。巻貝のような家型の形態は周辺に対して人の流れを誘導し、地域に開かれた新しい美術交流の場所をつくりだしていると思いました。

森案の「追憶の建築」は物体が崩壊を起こす瞬間の状態が美しい、という現象を建築化しようとう試みでした。面白い着眼点でしたが、その手法がインテリアを構成する要素にとどまっていたのが少々残念でした。自分が見いだした手法や思考の過程を、もっと建築的に現せるように何度も検討を重ねて、今後も設計を続けてほしいと思います。

社会に対し、自分らしい提案ができているか？という視点でみた場合、突出してインパクトを持つ作品はなかった。そこで私は、テーマや提案の自分らしさ、完成度、作品に秘められた可能性、という評価軸で審査を行った。結果的に、それぞれの評価軸でポイントをつけ、合計のポイントが多い作品を推していたように思える。

まず、審査委員同士で最も議論が多かった作品について触れたい。大越さんの「じいちゃんが障がいを教えてくれた。光のグラデーションが作り出す生活の秩序」である。作品のネーミングから、じいちゃんというユニークな個人に着目し、秩序という社会へ発展させなくてはならない、という意識が読み取れる。魅力的なベクトルである。しかし、プレゼンを見て、説明を聞いていると、じいちゃんという個人に対し、最適な固有解を提示しただけで終わってしまっているように思えた。過程はどうかであれ、結果として、彼女なりの普遍解が提示されていないと感じた私は、この作品を推さなかった。

建築家という職能を考えた場合、様々な要素をまとめあげる能力が必要となり、完成度という評価軸も大切だと思う。板部さんの「故郷甘木んコアば再構築します。まちの重心をつなぐアマギの杜」は、現状に対する問題意識、場所の選定、機能を分解して再構築したプログラムの提案、「絞り」という手法で形態を生み出す起承転結のなかで、破綻なく一貫性が保たれている完成度の高い作品であると感じた。

渡邊さんの「渋谷積層小学校 こどものイエ × マチ」は、荒削りで未完成の部分も多いが、作者が想い描いた都市空間に共感できた。プレゼンの中では言語化されていないが、可能性が秘められた作品だと感じた。エレベーターなどの設備が進歩する中で、都市における小学校は、郊外と同様、平面的なつながりを重視する低層タイプでなくても良いのでは？と私も思う。都市において、グラウンドレベルに取り残された子供たちを、活動領域を多層化することで解放し、複合施設を計画したこの作品に、グラウンドレベルから建築のヒエラルキーが解き放たれた都市の縮図を見た。

最後に、卒業設計とは？を考えたい。クライアントという個人と向き合い、設計を行っている私も、いかに個人を超越し、社会に対し普遍解を提案できるかが勝負だと考え、設計活動を行っている。テーマを自由に設定できる卒業設計は、自分が建築家として設計というツールを使って、社会に何を訴え、何を提案するのが問われるものだと思う。卒業し社会に出ると、コスト、クライアントの要望、法規、敷地の規制など、様々な縛りに翻弄される。私は、そのしがらみを解くことだけでは、建築家として不十分だと思う。現実という、しがらみに入る前に、卒業設計では、自己を知り社会と向き合い、大きく羽ばたいてほしい。

審査員 井上玄 /GEN INOUE

Sponsored By Tokai Architecture Organization
www.tokai-arch.org



審査員 白子秀隆 / 白子秀隆建築設計事務所